

『ソネット集』における嗅覚

—『ソネット集』と五感研究への試論

藤澤 博康

序

コルバンの『においの歴史』などのアナール学派の影響を強く受けた「感性の歴史」の解明に取り組む研究書が発表されるようになって久しい (Corbin 1996)。この領域に関心をもつ研究は、英米圏ではクラッセン、ハウス、クラーク等によって受け継がれ、近代初期のイギリスの人々の五感のあり方が次第に明らかになりつつある (Classen 1993; Classen, Howes and Synnott 1994; Clark 2007)。また、このような歴史の分野での成果とも呼応するかたちでシェイクスピア研究の分野でも、シェイクスピアの作品に表れた感覚に関する表象を分析しようとする論集も出版された (Gallagher and Raman 2010)。さらに、エリザベス朝文学の感覚表象研究という点では、オウィディウス (Ovid) に由来する「感覚の饗宴」というトポスについて古くからカーモード、ヴァンジュ、クルカス等へと研究が継承され、1595年に出版されたジョージ・チャップマンの「オウィディウスの感覚の饗宴」(‘Ovids Banquet of Sence’) を筆頭に同時代の詩人たちが感覚を駆使していかに詩を書いたかについて検証が行われている (Kermode 1961; Vinge 1975; Clucas 2003)。

しかし、このような研究の動向にもかかわらず、豊かな感覚表現を含むシェイクスピアの『ソネット集』については、感覚に焦点を絞った分析が今のところ十分に行われていないように思われる。そこで本論では、「感性の歴史」を探求する先に言及した歴史家たちの近年の成果について、嗅覚を中心に概観を行う。さらに、『ソネット集』の五感に関連した表現についての包括的な研究を行う試論として、特に嗅覚に関する表象に着目し、以下の部分でその表象の特徴について分析を行う。そして、この作業を通じて、『ソネット集』に登場する若者 (the young man) の美しい外見を詩人 (the poet) が賛美する、視覚に重点を置いたソネットが多い中で嗅覚がどのように機能しているのか、また視覚による認識の欠点をいかに嗅覚が補完しているかについて論じてみたい。

近代初期ヨーロッパにおける嗅覚についての認識

感性の歴史の成果を芸術作品の解釈に一早く持ち込んだ、『イタリア・ルネサ

ンス芸術における感覚世界』の著者、キヴィジェも嗅覚は「味覚や触覚といった肉体的世界と、視覚や聴覚といった空間的世界を仲介する感覚であると考えられていた」(“... smell was considered an intermediary sense between the corporeal world of taste and touch and the spatial universe of sight and hearing.”)と指摘する。さらに、ルネサンス以降この定義に変化が起り、「古代や近代初期の科学では、嗅覚を司る器官は鼻によって保護された腺で、脳の基幹に位置づけられた」(“For ancient and early modern science the organ of smell is a gland protected by the nose and located at the base of the brain...”)と述べ、嗅覚が具体的に器官として身体の中で位置づけられた変化を記述する。さらに続けて、キヴィジェは「魂の王座である脳への隣接のおかげで、嗅覚は気高い感覚となった」(“This proximity to the brain, the seat of the soul, somehow made smell a noble sense.”)と主張し、嗅覚が脳と関連づけられることで五感における位置づけが向上したと述べている (Quiviger: 125)。¹

嗅覚の地位が脳と関連づけられて向上する一方で、歴史の大きな流れとしては視覚優位の社会の到来が西洋社会では待ち受けていた。視覚と嗅覚の関連について、クラッセンは『感覚の世界』の中でバラの花が近代初期のイギリスでは、香水などの原料として用いられていたことを指摘する。そして、時代が進むにつれてバラが観賞用へと花としての利用法が変化していく過程を明らかにするとともに、この変化にフーコーやオングらの知見をもとに啓蒙主義の時代に視覚が支配する世界観が登場する瞬間を見ている (Classen: 7-8)。また、視覚に対する懐疑も近代初期には見受けられる現象であり、モンテーニュの『エッセー』などの影響などに言及しつつ、マイケル・ドレイトン (Michael Drayton) の「感覚に寄せて」(‘To the Senses’) などの例を引用し、クラークは鏡が映し出す像への不信とともに、「詩は目に関する疑念のもうひとつの豊かな源泉であった」(“Poetry, indeed, was another rich source of suspicions concerning eyes.”)と指摘している (Clark: 23)。

以上を総合して考えると、視覚優位の社会が誕生する啓蒙主義の時代以前の近代初期のイギリスでは、視覚はそれを通して認識するものについて完全には信頼されている感覚ではなく、他の感覚とも連動して機能する感覚であると理解され

¹『医学と五感』という論集に収められた、古代から17世紀までの医学における嗅覚について論じた論文においてパーマーは医学史の立場から、プラトン、アリストテレス、ガレン、フィチーノの著作を渉猟し、芳香にも悪臭にもなりうる臭いの二重性、臭いを司る器官、臭いの本質などを過去の著述家たちがどのように議論してきたかについて論じている。パーマーはガレンの医学書を紹介しながら、アリストテレスの著作に学びつつガレンが嗅覚の問題を独立した嗅覚の問題としてではなく、脳の問題として捉えていたとキヴィジェに近い指摘を行っている (Palmer: 61)。

ていた。そして、われわれが以下の議論で特に問題にしようとしている嗅覚は、脳と結びつけられると同時に、視覚と聴覚、触覚と味覚のちょうど中間的な役割の間で揺れつつも、五感の中で重要性を増していたと考えられる。

内面を見通せない視覚による認識への不安

ここで、これらの歴史的背景を考慮に入れた上で、具体的なソネットの分析に移る。『ソネット集』では若者は詩人にとって、太陽であり、美しい夏の一日のようであり、その瞳は星に譬えられたりする。ほかにも若者の美しさを表現した部分は枚挙に遑がなく、詩人は自分が若者に捧げたソネットが「偶像崇拜」(“idolatry”)と捉えられるのではないかと危惧している (‘Sonnet 105’ 1)。

このような崇高な存在とも言える若者の心を、詩人は自分がしっかりと掌握しているのか不安に駆られる瞬間が、『ソネット集』ではしばしば記述されている。たしかに、若者との親密な交流の実例として、詩人は「ソネット22番」に見られるように「心(臓)の交換」(heart exchange)という創作上の常套的手法を用い、若者の心を自らの身体に納めて一体感を表現してはいる。

... all that beauty that doth cover thee
Is but the seemly raiment of my heart,
Which in thy breast doth live, as thine in me. (‘Sonnet 22’ 5-7)²

しかし、このような安心感もいつまでも続くものではない。詩人は多くのソネットの中で若者の外見の美しさを絶賛してはいるが、あまりにも若者が手の届かない神々しい存在である上に、若者が時に詩人に対してつれない態度で臨むために、詩人はその心を見通せていないことに不安を表し、視覚による認識への不安を表現している。たとえば、「ソネット24番」ではいくら若者の美を一幅の絵に収めてみたところで、その絵は「だまし絵の技法を用いて」(“perspective”)描かれているために、肝心の若者の心まで見通せないと詩人は落胆している。さらに詩人の華美な衣装や虚飾を嫌い、若者の自然な美しさを賛美する姿勢には、必要以上に凝り過ぎた外見上の美が本質を誤って認識させる危険性が感じ取れる。

² シェイクスピアの『ソネット集』からの引用はすべて、Burrow 編集のオックスフォード版による。William Shakespeare. *The Oxford Shakespeare: The Complete Sonnets and Poems*. Ed. Colin Burrow. Oxford: Oxford University Press, 2002. また、本論で引用する日本語訳については、すべて高松雄一訳、『ソネット集』岩波文庫版を用いた。

本質と真理を嗅ぎ取る嗅覚

視覚は若者の美を描く上で欠かせない感覚であるが、それは同時に若者の内面と外面の乖離に気づくことができず、詩人の心に不安を生み出す欠点がある。それに対して嗅覚は趣味を弁えない人々のように、放たれた「悪臭」を受け取る場合もあるが、それは人間の内面の気高さを直感的に認識させてくれる利点がある。視覚とは異なり、『ソネット集』での詩人の嗅覚に対する信頼は揺るぎがない。詩人にしてみれば、百合やバラの美しさも、これらの放つ香りにも満足ではなく、詩人にとっては若者こそが匂いを語る上で、すべての芳香の理想とも言うべき存在として描かれている。

Nor did I wonder at the lily's white,
Nor praise the deep vermilion in the rose;
They were but sweet, but figures of delight,
Drawn after you, you patterns of all those. ('Sonnet 98' 9-12)

このソネットからも推察できるように、若者の放つ芳しい香りは、すべての花の見本となるもので、数ある花の中でバラはその理想に一番近い花にすぎない。この詩に見られるような若者を模範とする確固たる基準が設定されているために、詩人は嗅覚によって道徳的な判断を下すことにも躊躇しない。「ソネット94番」では、「いやしい雑草」(“The basest weed” 10)と詩人が極めて低い評価を下す人々と交わることで、甘美な香りを放つ百合ですら悪臭を放つ危険性があると若者に警告を行っている。

The summer's flower is to the summer sweet,
Though to itself, it only live and die,
But if that flower with base infection meet,
The basest weed outbraves his dignity:
For sweetest thing turn sourest by their deeds;
Lilies that fester smell far worse than weeds. ('Sonnet 94' 9-14)

このように『ソネット集』では人間の道徳的価値判定を行う基準のひとつに、嗅覚による判断が組み込まれていることは銘記されるべきである。³ また、『ソネッ

³ シェイクスピアの劇作品に描かれた嗅覚の表象と、嗅覚による道徳的判断については Nagler (1997) の論文が詳しい。ただ、Nagler は『ソネット集』の嗅覚表象については、ほとんど議論を行っていない。

ト集』では嗅覚が認識しようとする対象の本質や真理を見極める感覚として機能しており、詩人はこの感覚に信頼を寄せているように思われる。

若者のエッセンスの継承と永遠化

また、『ソネット集』の嗅覚の問題は、この詩集の大きな問題のひとつである時との戦いにも関連している。時は例外なく、すべてを破壊していく。若者の美しい外見も、その存在自体も時の経過による忘却によって忘れ去られて行く。周知のように、「ソネット1番」から「17番」にかけて詩人は若者に子孫を作り、顔に同じ面影をもった子供を後世に残し、時の浸食に打ち勝つように、若者に忠告している。詩人の時への抵抗は嗅覚の面でも行われており、それは主に「蒸留」(“distillation”)の主題のもとでなされている。⁴「ソネット5番」と「6番」と同様に蒸留の主題を扱った「ソネット54番」ではバラと野バラ (canker-blooms) が対比され、両者は外見上では美しさには変わりはないが、バラに宿る香りのためにバラはなお一層美しく思われるようになると詩人は詠う。

O how much more doth beauty beauteous seem
By that sweet ornament which doth give.
The rose looks fair, but fairer we it deem
For that sweet odour which doth in it live. ('Sonnet 54' 1-4)

ところが、詩人の「野バラの美德は外見だけだ」(“their virtue only is their show”)という強い否定の言葉により、野バラはバラよりも格下の評価が下される。さらに野バラはただ枯れ果てるだけであるが、芳しい香りを放つバラは香水となって、その本物のエッセンスを永遠のものとする。

... Sweet roses do not so;
Of their sweet deaths are sweetest odours made:
And so of you, beauteous and lovely youth:
When that shall vade, by verse distils your truth. ('Sonnet 54' 11-14)

⁴蒸留の歴史についてはForbes (1948)を参照。また、Moran (2005)やSimonds (1999)のように蒸留を新プラトン主義の伝統と結びつけて考察を加えようとする研究者がいる一方で、Wall (2010)はシェイクスピアが活動していた当時のイギリスでは蒸留は家事の手引書や調理本の中で家庭内の台所で行われる作業として位置づけられていた事実を指摘し、『ソネット集』に描かれた蒸留のイメージを錬金術と関連づけて説明しようとする研究に対して警鐘を鳴らしている(Wall: 92)。

このソネットからも分かるように、詩人にとってバラの放つ芳香は高貴な者とそうでない人々を分ける一種の基準となっている。この点において、詩人は極めて貴族的な態度を示している。そしてまた、詩人の詩という蒸留によって、一旦死を遂げても、香水となって不死鳥のように蘇り、若者の精髓となる部分は永遠のものとなされ、生きながらえるのである。この意味において蒸留はまさに若者の香りを永遠のものにし、時との戦いに勝利するための有効な手段なのである。

黒い女と香り

これまで見たように、若者が放つ芳しい香りを描いたソネットはいくつも『ソネット集』には含まれているが、次に詩人が若者以外にソネットを捧げている黒い女 (the dark mistress) についても嗅覚の観点から考察を加えておこう。若者の場合とは異なり、『ソネット集』では、彼女が放つ香りを賛美する事例は皆無である。「ソネット130番」で詩人は彼女の目が太陽にはほど遠く、唇の赤さは珊瑚のほうが遥かに赤いとけなした後で、黒い女の吐く息についても「あの人が吐く息よりももっと喜びを与えてくれる香水もある」(“And in some perfumes is there more delight / Than in the breath that from my mistress reeks.” ‘Sonnet 130’ 7-8) と評し、その吐息を讃える素振りを見せない。しかし、この否定的な評価は、「だが、天に誓って言うが、わが恋人は偽りの比較によってでっつけられたりかなる女性と較べても、そうはいない」(“And yet, by heaven, I think my love as rare / As any she belied with false compare.” 13-14) という締めくくりによって彼女への評価が一挙に反転される。この価値の劇的な転倒を含んだ手法は、詩集の後半の「ソネット141番」にも継承される。通常、五感を駆使して対象を賛美する際に用いられる「感覚の饗宴」のトポスに対抗しているかのように映るこのソネットは、「実のところ、私はお前を目で愛してはいない」(“In faith I do not love thee with mine eyes...” 1) という黒い女の容姿への全否定で始まる。さらに視覚に留まらず、聴覚、触覚、嗅覚を通して彼女の美德は続々と否定されていく。

Nor are mine ears with thy tongue's tune delighted,
Nor tender feeling to base touches prone,
Nor taste, nor smell, desire to be invited
To any sensual feast with thee alone... (Sonnet 141' 5-8)

ただ、このような所謂「感覚の饗宴」(“sensual feast”)に招待したいとは思わない黒い女であるが、「五つの知性も五つの感覚も、愚かな心ひとつすら説得して

お前に仕えるのを止めさせられない」(“But my five wits nor my five senses can / Dissuade one foolish heart from serving thee…” 9-10) と、彼女の魅力について詩人は当惑している。これら二つのソネットからも分かるように、黒い女は若者とは大きく異なり、詩人の感覚を芳しい香りで楽しませることはないが、不思議な魅力によって詩人の心を捉えて離さない存在として位置づけられている。

触覚と味覚の対象としての黒い女

この黒い女の不思議な魅力というのは、主に彼女の肉体的な魅力に根ざしているように思われる。感覚という観点から見て、黒い女に捧げられたソネットと若者のそれとを大きく分ける違いを指摘するならば、若者に捧げられたソネットでは触覚や味覚といった身体への直接的な接触を前提とした表現がほとんど見受けられないのに対し、黒い女に捧げられたソネットではその事例が散見できることが挙げられる。「ソネット128番」では、鍵盤楽器を弾く黒い女に対して、詩人は彼女の掌に跳ね返る鍵盤を率直に羨んでいる。「おまえの柔らかな手の窪に接吻しようとして、素早く跳びあがる鍵どもを…」(“Do I envy those jacks that nimble leap / To kiss the tender inward of thy hand…” ‘Sonnet 128’ 5-6)。さらに、詩人は口づけをさせてくれるなら、鍵盤を意味する「命の宿っていない木片」(“dead wood” 12) と入れ替わってもよいとさえ述べ、最終的には「生意気な鍵盤はこれで満足なのだから、奴らにはお前の指を、私にはお前の唇をくれ」(“Since saucy jacks so happy are in this, / Give them thy fingers, me thy lips to kiss.” 13-14) と大胆な要求を突きつけている。また、「ソネット143番」でも、今度は打って変わって子供が母親に懇願するように、黒い女に口づけを求めている。

Whilst I, thy babe, chase thee afar behind.

But if thou catch thy hope, turn back to me

And play the mother's part: kiss me, be kind. (‘Sonnet 143’ 10-12)

『ソネット集』では、若者を表現したソネットに関する限り、若者本人にこのような直接的に肉体的な接触を求める表現は皆無である。また、直接的な性交渉を暗示させる表現も、『ソネット集』では黒い女を描いたものに限られている。

また、味覚を扱った表現についても、『ソネット集』では食欲の類推から情欲と結びつけられて描かれているが、以下のソネットは黒い女に向けられているように思われる。

My love is as a fever, longing still
For that which longer nurseth the disease,
Feeding on that which doth preserve the ill,
Th' uncertain sickly appetite to please.
My reason, the physician to my love,
Angry that his prescriptions are not kept,
Hath left me, and I desperate now approve
Desire is death, which physic did except. (Sonnet 147 1-8)

このソネットからも詩人の黒い女への愛は激しいもので、それは医師である理性が愛想を尽かして治療を放棄するほどまでに描かれている。食欲は情欲と関連づけられて、時に理性では抑制できないものとして捉えられている。そして、抑えの効かない情欲を刺激する相手として、黒い女が想定されている。

以上、『ソネット集』における触覚と味覚の表象が黒い女を扱ったソネットに集中している事実を確認してきた。詩人は黒い女に関して若者に対する態度とは異なり、身体的な接触を素直に表現すると同時に自身の情欲を駆り立てさせ、肉体への嫌悪を抱かせる存在として認識している。また、若者のような香り立つ芳香は、黒い女にはなく、彼女には若者のような高貴さを感じ取ることはできない。ただ、高貴さの不在の代償としてどこか肉感的で、詩人の性的な欲望を受け入れる要素が彼女には感得できる。そして、詩人は黒い女が代表する肉欲や情欲に嫌悪と不快感を覚えながらも、その不思議な魅力に惹かれてしまう複雑な感情を『ソネット集』で吐露している。

結論

『ソネット集』は同時代のソネット連作にはめずらしい、若者と黒い女という二つの中心をもつ構造上の特殊性を生かしつつ、若者に代表される視覚を中心にした高級な感覚と、黒い女性に代表される触覚や味覚を中心にした低級な感覚が司る世界を我々読者に提示してくれている。一方で詩人は、視覚を中心として魅力的で神々しい存在として表現された若者に対して羨望の眼差しと賛嘆の言葉を惜しまないが、同時に移り気な若者の本心を視覚による認識だけで把握することができない不安に苛まれている。視覚で若者を理解しようとしても、若者との埋めがたい距離が前提としてあるために、若者の本心の完全な理解は不可能である。ところが、黒い女に目を向けても、彼女には若者のような外見上の美もなければ、讃えるべき美德もない。ただ、彼女には若者の場合では不可能であった、直接手に触れ、情欲を味わうことができる接触可能で官能的な魅力が備わってい

る。ただし、詩人は同時にその肉への嫌悪感を表明している。こうした理由により、これらの対極的な恋人、対極的な感覚に依拠している限り、詩人の心の平安はない。

これら両極の間隙を縫い、両者の補完を行うかたちで、『ソネット集』ではキヴィジェの言う「中間的」な感覚として嗅覚が機能している。相反するかのような『ソネット集』における主要な二つの中心と、それらとそれぞれ対応した高級な感覚と低級な感覚の間で揺れ動きながらも、若者の卓越した美德を一瞬のうちに香りとして直覚的に把握できる嗅覚に詩人は絶大なる信頼を置いている。そして、詩人にとって、嗅覚は肉体からのエッセンスの昇華を可能にする蒸留という隠喩に代表されるように、黒い女を描く際に詩人が見せた肉体への嫌悪感とは無縁で、しかも若者の芳しい香りを永遠のものとして閉じ込め、その匂いを選ばれた後世の人々に伝えることを可能にさせてくれる貴重な感覚であったのである。

近畿大学

参考文献

- Clark, Stuart. *Vanities of the Eye: Vision in Early Modern European Culture*. Oxford: Oxford University Press, 2007.
- Classen, Constance. *Worlds of Sense: Exploring in History and across Cultures*. London: Routledge, 1993.
- Classen, Constance, David Howes, and Anthony Synnott, eds. *Aroma: The Cultural History of Smell*. London: Routledge, 1994.
- Clucas, Stephen. 'The Banquet of Sense: Elizabethan Ovidianism and Its Discontents.' *EnterText* 3.1 (2003), 31-58. Web. 23 Sep. 2011
- Corbin, Alain. *The Foul and the Fragrant: Odour and Social Imagination*. Trans. Miriam L. Kochan. London: Papermac, 1996.
- Forbes, R. J. *Short History of the Art of Distillation: from the Beginnings up to the Death of Cellier Blumenthal*. Leiden: Brill, 1948.
- Gallagher, Lowell, and Shankar Raman. *Knowing Shakespeare: Senses, Embodiment and Cognition*. London: Palgrave Macmillan, 2010.
- Kermode, Frank. 'The Banquet of Sense.' *Bulletin of the John Reylands Library* 44.1 (1961), 68-99.
- Moran, Bruce T. *Distilling Knowledge: Alchemy, Chemistry, and the Scientific Revolution*. Cambridge: Harvard University Press, 2005.
- Nagler, Danielle. 'Towards the Smell of Morality: Shakespeare and Ideas of Smell 1588-1625.' *Cambridge Quaterly* 26 (1997), 42-58.

- Palmer, Richard. 'In Bad Odour: Smell and Its Significance in Medicine from Antiquity to the Seventeenth Century.' *Medicine and the Five Senses*. Ed. W. F. Bynum and Roy Porter. Cambridge: Cambridge University Press, 2005. 61-8.
- Quiviger, François. *The Sensory World of Italian Renaissance Art*. London: Reaktion Books, 2010.
- Shakespeare, William. *The Oxford Shakespeare: The Complete Sonnets and Poems*. Ed. Colin Burrow. Oxford: Oxford University Press, 2002.
- Simonds, Peggy Muñoz. "Sex in a Bottle: The Alchemical Distillation of Shakespeare's Hermaphrodite in Sonnet 20." *Renaissance Papers 1999* (1999), 97-105.
- Vinge, Louis. 'Chapman's Ovids Banquet of Sence: Its Sources and Theme.' *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 38 (1975), 234-57.
- Wall, Wendy. "Distillation: Transformations in and out of the Kitchen." *Renaissance Food from Rabelais to Shakespeare: Culinary Readings and Culinary Histories*. Ed. Joan Fitzpatrick. London: Ashgate, 2010. 89-104.
- シェイクスピア, ウィリアム 【ソネット集】 高松雄一訳 東京: 岩波書店, 1986年

Sense of Smell in *The Sonnets*: An Essay on the Study of *The Sonnets* and the Five Senses

Hiroyasu Fujisawa

Since the appearance of Alain Corbin's *The Foul and The Fragrant*, many studies on the history of senses have been published. Some Shakespearean scholars have just begun to learn from these studies and apply their achievements to the interdisciplinary studies of Shakespeare, along with the study of the *topos*, the "banquet of sense" in Elizabethan poetry. This essay first glimpses François Quiviger's point that "smell was considered an intermediary sense between the corporeal world of taste and touch and the spatial universe of sight and hearing," and that the smell gradually comes to be associated with the brain, which improved its status in the hierarchy of the five senses. As for the importance of sight in the Age of Enlightenment, the essay also mentions Constance Classen's study of the shift in the use of roses from the material of perfumes to the objects of visual appreciation. It never forgets to remind us of Stuart Clark's remark that the sixteenth century English poetry "was the rich source of suspicions about the eyes." Owing much to these historians' points, this essay focuses on the representations of the sense of smell in William Shakespeare's *The Sonnets* and tries to show how this sense functions within the poetry.

Next, this essay analyses many sonnets designed to praise the beautiful appearance and virtues of the young man through the sense of sight in *The Sonnets*. Despite the numerous admirations of him, the poet similarly expresses his anxiety of failing to understand the young man's heart and his disgust at the excessive ornaments and luxurious clothes that take away from the young man's natural beauty. These are the cases, this paper maintains, that prove the poet's disbeliefs in sight.

Given this, the essay goes on to suggest that the poet is very confident in what he perceives not through the eyes but through smell throughout the work. For the poet, the young man is the example of the smell by which he can judge everything according to whatever odour it emits. In terms of the advantages of the smell in *The Sonnets*, this essay chooses the topic of distillation as a typical instance of the poet's distinguishing genuine nobleness from vulgar

fellows. We can extract the essence of, say, roses, by distillation. The poet is keenly aware of the mysterious process of the art and makes the most of it to emphasise the difference of the noble nature of the young man compared with others. He also employs the theme as a strategy for running counter to Time's destruction.

Following the discussions about the young man, the paper shifts its focus from him to the dark mistress, the other love of the poet. It calls our attention to the surprising fact that the poet never praises the dark mistress' smell throughout *The Sonnets*. Although the poet attempts to use the *topos* of a "banquet of sense" in order to represent her, he later declines it, saying that no senses "desire to be invited / To any sensual feast with thee alone." (Sonnet 141' 8) Taking that fact into account, this essay argues that it is true that no senses including the sense of smell fascinate the poet, but that 'Sonnet 141' is dramatically successful in completely subverting the poet's evaluation of the dark mistress by making him confess honestly, "But my five wits nor my five senses can / Dissuade one foolish heart from serving thee..." (Sonnet 141' 9-10)

Besides the examples that deal with sight and smell, the paper points out that representations of taste and touch in *The Sonnets* are mainly concerned with the dark mistress, not the young man, and that in those sonnets dedicated to her, the poet does not hesitate to openly express his carnal desire or hopes to touch her while he merely worships or fears the betrayal of the young man in the other sonnets of the work.

In conclusion, the essay maintains that sense of smell makes the most of its "intermediary" nature classified just between the high sensorium such as seeing and hearing and the low sensorium like taste and touching and supplements the defects of sight that often fails to perceive the young man's heart. It is true that the poet may oscillate between the high and the low sensoria which the two main masks in *The Sonnets*, the young man and the dark lady, respectively correspond to. However, he firmly believes in the power of sense of smell in that he can intuitively sense through it what the essence and truth is represented in the form of the young man.

Kinki University